The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	容与堂本『水滸伝』「李卓吾評」に関する初歩的研究：人物批評に注目して
Author(s)	佐髙，春音
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

容与堂本『水滸伝』「李卓吾評」に関する初歩的研究
―人物批評に注目して―

佐髙春音

１　はじめに

明清時代の通俗小説は、「評点」を備えた形で刊行されたものが多い。評点とは、評語や批語と呼ばれる評者によるコメントと、一般に圏点と呼ばれる記号類の総称である。有名人の評点が付された書物は付加価値がつき、より売り上げが見込まれることから、偽托も横行した。明末の著名な思想家・李卓吾（李贄）は、とりわけ多くの書物にその名が掲げられている。『水滸伝』に限っても、本稿で扱う「容与堂本」をはじめとして、複数の版本が「李卓吾評」を標榜している。現在知られているものを以下に示す。

- 「李卓吾先生批評忠義水滸傳」全 100 回（通称「容与堂本」）
- 「忠義水滸傳」全 100 回（通称「無窮会蔵本」）[1]
- 「忠義水滸全傳」全 120 回（通称「全伝本」）[2]
- 「水滸傳全本」全 30 回（通称「三十巻本」）[3]

李卓吾が『水滸伝』に評点を付し、それが書物として刊行されたことを示唆する記録として、李卓吾の友人である袁中道の日記「遊居柿録」があり、万暦四十二年の出来事として、以下のことが語られている。

> 袁無涯來、以新刻卓吾批點水滸傳見遺、予病中草草視之。記萬曆壬辰夏中、李龍湖方居武昌朱邸、予往訪之、正命僧常志抄寫此書、逐字批點[4]。
> （袁無涯がやって来て、新刻の李卓吾批点『水滸伝』を置いていったので、私は病に臥せる中、ざっと目を通した。記憶では、万暦壬辰の夏、李龍湖〔李卓吾を指す〕は武昌の朱邸におり、私が訪問すると、ちょうど僧の常志に命じてこの書を書き写させ、逐字批点を加えていた。）

李卓吾評を標榜する『水滸伝』の中で、特に容与堂本と全伝本は、真筆である可能性について盛んに議論されてきた。しかし、魯迅が『中国小説史略』の中で「どちらも浅薄であり、おそらく葉昼の輩が偽托したものであろう。（『書影』第一巻に詳しい））[5]」と述べるように、葉昼という人物による偽托とする説も広く知られている。『書影』は蔵書家としても知られる明末清初の文人・周亮工が記した随筆集で、別名を『因樹屋書影』と言い、その第一巻に葉昼についての記述がある。

> 葉文通、名晝、無錫人。多読書、有才情。……中略…… 當温陵『焚』、『蔵』書盛行時、坊間種種借温陵之名以行者、如『四書第一評』、『第二評』、『水滸傳』、『琵琶』、『拝月』諸評、皆出文通手[6]。
> （葉文通、名は晝〔昼〕、無錫の人である。多くの書物を読み、優れた才を持つ。……

---

[1] 封面題「李卓吾先生評繪像水滸傳」。なお本稿では、原則として原典資料の引用にはもとの字体を使用し、その他については常用漢字体を用いる。
[2] 引首題「新鐫李氏藏本忠義水滸全傳」。全伝本を覆刻した「忠義水滸全書」と題する系統もあり、あわせて百二十回本と呼ばれている。
[3] 文簡本。パリ国立図書館蔵本の封面題「李卓吾原評忠義水滸全傳」、東京大学蔵本の封面題「李卓吾先生評水滸全傳」。
[4] 袁中道「遊居柿録」巻九（『珂雪齋集』下冊、上海古籍出版社、1989 年、1315 頁）。
[5] 魯迅『中国小説史略』（齊魯書社、1997 年、117 頁）。原文「両皆弇陋、蓋即葉昼輩所偽托。（詳見『書影』一）」。
[6] 周亮工『書影』第一巻（上海古籍出版社、明清筆記叢書所収、1981 年、9 頁）。

中略……温陵〔李卓吾を指す〕の『焚書』、『蔵書』が盛行した時、坊間で温陵の名を借りて刊行された様々なもの、たとえば『四書評』の第一評、第二評、『水滸伝』、『琵琶』、『拝月』などは、みな文通の手によるものである。）

上記のほか、明代の文人・銭希言の『戲瑕』巻三「贋籍」にも、李卓吾評を標榜する複数の書籍が、いずれも葉昼の手によるものであることを指摘する記述がある。廣澤裕介氏は、銭希言が列挙した書籍の半数が容与堂の刊行物と重なることなどから、「名指しこそしてはいないが、その矛先は容与堂に向いていると見て大過あるまい」との見解を示している。[7]

容与堂本の評者が葉昼であるのか、それとは別の人物であるのか、あるいは本当に李卓吾であるのか、現在のところ、決定打となる説が出るには至っていない。本稿では、評者が誰かという問題には深入りせず、李卓吾の名を冠する容与堂本の批評（便宜のため、以降「容評」と称す）として扱う。

容評に焦点をあてた研究は、川島優子氏が評中に頻出する「畫」「妙」といった一文字の評語に着目して精緻な分析を行うなど[8]、近年少なからず進展が見られるものの、依然として数が多いとは言えず、更なる検討の余地を残している。そこで、本稿では、容評における人物批評に注目し、その特徴についてあらためて検討してみたい。より具体的には、白話小説における評語が、作中人物についてどのように語るか――どのような表現や形式によって、どのような内容を述べあらわすか――という点に焦点を当てる。調査・整理段階の点も多く、初歩的な考察にとどまるものではあるが、評点研究に些かでも新たな視点をもたらすことを期す。

２　容与堂本とその評点の概要

容与堂本[9]:

巻首題「李卓吾先生批評忠義水滸傳」。100 巻、100 回。序文に万暦三十八年を示す記述があり、明万暦の刊行と目される[10]。

- 版式：四周単辺、有界、毎半葉 11 行 22 字、白口、単黒魚尾。
- 評語：眉批、傍批、夾批、回末総評[11]。
- 圏点：マル「〇」、傍線、カギ括弧[12]。

回中の評語は眉批と傍批が主であり、ごく稀に夾批が見える。一文字から数文字の短い評語を主とし、単語や短い句のまとまりが多くを占める。回の末尾には数行の総評が置かれ、「李卓吾曰」「李禿翁曰」「李和尚曰」などの形式により、李卓吾の言として記されている。本文中の注目すべき箇所や批評の対象となる箇所は、文字の右横にマルを付して強調される。評者が批判的な見解を示す箇所には傍線が引かれることが多く、削除すべき（「可刪」）と判断する部分はカギ括弧で括られる。

現存する『水滸伝』の中で最も古いものは、嘉靖年間の刊行と目される通称「嘉靖本」（巻首題「忠義水滸傳」）である。嘉靖本は第 47 回から第 49 回および第 51 回から第 55 回の計 8 回分のみが残存しているが、そこには評語や圏点は一切

---

[7] 廣澤裕介「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」（『未明』第 24 号、2006 年、8 頁）。

[8] 川島優子「容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』の評語に関する考察 ：「畫」を中心として」（『東方学』第 136 輯、2018 年）、同氏「『李卓吾先生批評忠義水滸伝』における評語「妙」に関する小考」（『明清文学論集　その楽しさ その広がり』東方書店、2024 年）。

[9] 容与堂本の引用は、『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、1975 年）による。なお、本稿で引用する『水滸伝』各版本の原文中の句読点は筆者が付したものである。

[10] 当該の序文は、現存する容与堂本系諸本の中で、内閣文庫蔵本のみが有している。

[11] 本文の上欄に記される評語を「眉批」、本文の文字横に記される評語を「傍批」、本文中に小字双行で割書される評語を「夾批」と呼ぶ。

[12] 文の区切りや間を示す句読点に類する記号の使用法は認められない。

見られず、全体も同様であった可能性が高い。『水滸伝』は初め評点のない形式で刊行され、後に評点を備えるようになったと考えられる。現存する『水滸伝』の中で、容与堂本は最も早期に評点が施された版本にあたる。

容与堂本の回中に見られる評語は、一文字から数文字の短いものが主であることはすでに述べたが、とりわけ一文字の評語は出現頻度が高く、容評を特徴づける要素の一つとなっている。この一文字評に関して、まず川島優子氏の研究を紹介しておきたい。同氏は一文字評の各語に異なる使用傾向が認められることを指摘している。たとえば、最も出現回数の多い「畫」は、絵のようにリアルな描写を評価する語であり、描写が優れた場面に付与されるが、主人公たちではなく周辺の小人物たちの姿を描く際に付される傾向があるという。また「畫」に次いで多く用いられる「妙」は、素晴らしい・巧みであるといった意味の賞賛の語であり、台詞回しや場面がコミカルであるなど、「笑い」と結びつく場面に付される傾向があるという[13]。

容与堂本の一文字評には、前述の「畫」「妙」に加え、細かなニュアンスは異なるものの、いずれも素晴らしいこと評価する語である「好」「佛」「趣」、正しい・賛同できることを示す「是」など、賞賛や肯定をあらわす語が多く見られる。また、愚かであることを意味する「痴」、悪質・非道であることを示す「賊」「悪」などのように、否定や批判を示す語も用いられる。これらの一文字評は、読者に対する解説としての性格よりも、評者がその時々に感じたことをそのまま言葉にしたかのような、感情の表出に近い性格を強く帯びていると言えよう[14]。

３　容与堂本の人物批評

（１）「人物を描くこと」への眼差し

容与堂本には、絵のようにリアルな描写を評価する「畫」や「如畫」、真に迫っていることを意味する「逼真」、形容が巧みであることを称える「好形容」といった評語がしばしば見られる。これらの評語は、いずれも「如何に描くか」という小説の語りの問題に対する関心を示している。また、「如何に人物を描くか」という点については、下記の総評に注目すべき指摘がある。

- 第 3 回総評：如魯智深、李逵、武松、阮小七、石秀、呼延灼、劉唐等衆人、都是急性的、渠形容刻畫來、各有派頭、各有光景、各有家數、各有身分。
  （魯智深、李逵、武松、阮小七、石秀、呼延灼、劉唐といった人々は、いずれも短気な性格だが、彼らを克明に描き出すにあたり、それぞれ異なる風格があり、姿があり、系統があり、身分がある。）
- 第 24 回総評：說姪婦便象箇姪婦、說烈漢便象箇烈漢……（中略）……姪婦、烈漢、呆子、馬泊六、小猴子、光景在眼。姪婦、烈漢、呆子、馬泊六、小猴子、聲音在耳。
  （淫婦を語ればまさに淫婦らしく、豪傑を語ればまさに豪傑らしい……（中略）……淫婦、豪傑、間抜け者、遣手婆、小僧の姿が目に見える。淫婦、豪傑、間抜け者、遣手婆、小僧の声が耳に聞こえる。）

『水滸伝』には、第 3 回総評に名が挙げられている魯智深・武松・李逵らをはじめとして、粗野で直情的な性格を持つ作中人物が多く登場する。しかし、似た類型に属する人物であっても、それぞれには異なる個性があり、その違いが描き分けられていることを容評は指摘する。さらに、その点は周辺人物にも及び、主役・

[13] 注 8 前掲論文。

[14] 鄧雷氏は、容与堂本の評語を「きわめて強烈な感情が潜んだ評語の中で、評者の態度を表明するだけでなく、更には鋭い言葉で小説中の人物や事柄を批判することもある」と評している。鄧雷「明代『水滸伝』評点的歴史変遷」（『内江師範学院学報』第 29 巻第 3 期、2014 年、8 頁）原文「除了極其強烈的感情潜蔵在容本批語文字中表明評者的態度之外、更有甚者以尖鋭的話語批判小説中之人与事」。

脇役を問わず、本当に実在するかのような真実味を持って描き出されていることを述べる。

上記の総評が見える第24回は、『水滸伝』の中でも特に名文として名高い「武松の西門慶・潘金蓮殺し[15]」の一幕にあたり、「姪婦」は潘金蓮、「烈漢」は武松、「呆子」は武大、「馬泊六」は王婆、「小猴子」は鄆哥[16]を指す。同様の評語は回中にも見られる。潘金蓮の誘惑をきっぱりと拒絶した後、何も知らずにやって来た武大に声をかけられるが、返事をせずにそのまま家を後にする武松と、何があったのかと尋ねる武大に対して怒鳴り散らす潘金蓮の姿が描かれる場面に、以下の眉批が付されている。

> 將一箇烈漢、一箇呆子、一箇姪婦人、揃寫得十分肖像、真神手也。
> （一人の豪傑、一人の間抜け者、一人の淫婦を、それぞれ十分にそれらしく描いており、まさに素晴らしい筆致である。）

潘金蓮が罵るセリフには「昼〔晝と同義〕」の傍批も見える。また、第45回には潘巧雲という別の淫婦が登場するが、彼女の言動にも「把姪婦姪態一一畫出（淫婦の淫らなさまを一つ一つ描き出す）」、「把姪婦情狀刻画逼真（淫婦の様子をリアルに描き出す）」などの指摘があり、「昼」も多く付されている。作中の淫婦たちは、主人公たちから憎まれる脇役人物であるものの、その描き方に対して、評者は高い評価を示している。

『水滸伝』における作中人物の造形とその描き方への評価という点では、作品の本文を大幅に改変し、大量の評点を付して独自の『水滸伝』（いわゆる「金聖歎本」）を刊行した明末清初の文人・金聖歎による言論がよく知られている。たとえば、金聖歎本の巻頭に置かれた序文および「讀第五才子書法」には、次のような記述がある。

- 「序三」：水滸所敘、敘一百八人、人有其性情、人有其氣質、人有其形狀、人有其聲口。
  （『水滸伝』の叙述は、108人を叙述するのに、人々にはそれぞれの性情があり、気質があり、姿があり、声がある。）
- 「讀第五才子書法」：水滸傳寫一百八箇人性格、真是一百八樣。／水滸傳只是寫人麤鹵處、便有許多寫法[17]。
  （『水滸伝』は108人の性格を描いており、本当に108通りである。／『水滸伝』は人物の粗野なところを描くだけでも、多くの描き方がある。）

上記に見られる観点は、先に挙げた容評と共通するところが多い。金聖歎本の底本は百二十回本（全伝本と全書本の系統の総称）だが、容与堂本もあわせて参照していたであろうことが先行研究によって指摘されている[18]。ただし、金聖歎評の場合には、これらの指摘のみならず、類似した性格を持つ人物の間にどのような違いがあるのか、それがどのような言動から読み取れるのかといった点についての細かな考察が随所に見られる。また、たとえば潘金蓮の動作――「一只手便去武

---

[15] 物語の概要：潘金蓮は醜い夫・武大を嫌い、義弟の武松を誘惑するが拒絶される。武松の留守中、彼女の美貌に目をとめた西門慶と密通し、二人とその仲立ちをした王婆は結託して武大を毒殺する。家に戻った武松は真相を暴き、兄の仇討ちをする。

[16] 武松の手助けをする梨売りの少年。

[17] 金聖歎本の引用は、古本小説集成所収『第五才子書水滸傳』（上海古籍出版社、1990年）による。

[18] 竹下咲子「金聖歎批評の源流を探る――百二十回本『水滸伝』李卓吾批評を中心に」（『和漢語文研究』第7号、2009年）など。

松肩胛上只一捏（もう一方の手で武松の肩をきゅっと掴む）」――の直後に、「寫婬婦便是活婬婦（淫婦を描くと、まさに生きた淫婦となる）」という割書の評語を挿入するなど、その人物らしさをあらわす叙述に対して、より具体的な指摘と分析を数多く行っている。

容評が評価と指摘のレベルにとどまるのに対し、金聖歎評は全篇にわたって施した膨大な評語を通して、洗練された文学理論を提示する[19]。両者が同じ次元にあるとは言えないが、人物の造形とその描き方に関する金聖歎の視点は、突如として現れた全く新しいものというわけではなく、その萌芽がすでに容評に見られることを見落とすことはできない。

（２）「人物そのもの」への眼差し

容与堂本には、作中人物がどのような人物であるか――どのような性質を持った人物であるか――ということに言及する評語が数多く見られる。本稿ではその中でも、人物の性質に関して、「〇〇は△△な人である」「△△である」と簡潔かつ断定的に述べる評語に着目し、その概要を示す。仮にこの種の評語を「性質断言型の評語」と呼ぶこととする。

当該の評語は、前掲の総評にも名が挙げられていた武松・魯智深・李逵といった人物たちに多く用いられており、彼らの肯定的な側面が強調されている。特に李逵は同種の評語が際立って多く、第 38 回で初登場して以降、その活躍が描かれるたびに、李逵がどのような人物であるかということが、繰り返し評中で示される。以下にその例を挙げよう[20]。なお、同一回内で同じ表現が複数回用いられる場合は引用を省略し、日本語訳は初出の語句にのみ付す。

【性質断言型の評語：李逵】

- 第 38 回：妙人（素晴らしい人）／李大哥真是大雅（李の兄貴は真に超俗的である）
- 第 39 回：快人（さっぱりした人）
- 第 40 回：真忠義、真好漢（真に忠義、真に好漢）／妙人
- 第 41 回：真忠義／妙人／李大哥當是不食烟火人（李の兄貴はまさに凡人ならざる人である）
- 第 42 回：孝子（孝行者）／天性孝子（生まれながらの孝行者）
- 第 43 回：好箇直性人（なんとも真っ直ぐな人）／李大哥纔是孝子（李の兄貴こそが孝行者である）／李大哥真是言不必信、行不必果的大人（李の兄貴はまさに“ただ義に従う”大人物である）[21]／亦是妙人、亦是孝子（“妙人”でもあり、孝行者でもある）／孝子弟弟（孝行な子）
- 第 47 回：李大哥畢竟是個趣人（李の兄貴はやはりおもしろい人である）
- 第 50 回：妙人
- 第 52 回：真忠義／大聖人（偉大な聖人）／李大哥真活佛（李の兄貴は真に生きた仏）
- 第 53 回：直人、快人（真っ直ぐな人、さっぱりした人）／妙人／快人／

[19] 金聖歎の文学理論については多くの先行研究がある。鐘錫南『金聖歎文学批評理論研究』（上海古籍出版社、2006 年）、楊清恵『文法――金聖歎小説評点之敘事美学研究』（大安出版社、2011 年）、周淑婷『金聖歎小説叙事理論研究』（広西師範大学出版社、2022 年）など。

[20] 本稿で挙げる用例は、現時点で確認できた範囲のものであり、網羅的な一覧には至っていない。今後の調査・整理により、追加・修正が生じる可能性がある。また、「性質断言型」として扱う評語の範囲についても、今後慎重に検討していく必要がある。しかしながら、本稿の段階においても、全体の傾向を示すことは可能である。

[21] 『孟子』「離婁章句」の「大人者、言不必信、行不必果、惟義所在（大人物は、言葉が全て信義にかなう必要はなく、行動が全て成果を伴う必要もなく、ただ義にかなっていればよい）」を踏まえる。

真忠義

- 第 54 回：李大哥纔是箇真人（李の兄貴こそが真の道を体得した人である）／真忠義／李大哥是箇忠義漢子（李の兄貴は忠義の男である）
- 第 61 回：妙人
- 第 67 回：妙人／李大哥真是異人（李の兄貴は真に常人離れした人である）
- 第 68 回：妙人
- 第 71 回：真忠義／李大哥是箇天民（李の兄貴は天理に通じた人である）
- 第 72 回：妙人
- 第 73 回：奇人（特異な人）／真人（真の道を体得した人）／真漢子（真の男）／李大哥真是忠義漢子（李の兄貴は真に忠義の男）／妙人／真漢
- 第 74 回：李大哥是毌意必固我者也（李の兄貴は自らの意見に固執しない人である）／妙人／李大哥是聖人（李の兄貴は聖人である）
- 第 92 回：真忠義／李大哥纔是言顧行、行顧言底君子（李の兄貴こそが言行一致の君子である）
- 第 95 回：豪傑
- 第 100 回：好直性人（なんとも真っ直ぐな人）／真忠義

李逵に対する評語として頻繁に登場するのが「妙人」という表現である。川島優子氏は、一文字評「妙」が李逵の言動に多く付されることを指摘しており、李逵という人物を語るうえで、「妙」が中心的な語となっていることがわかる。「妙人」とは、「妙」があらわす称賛に値する人物であることを示しており、李逵はまさに「妙」の体現者として扱われているといってよい。たとえば武松にも「妙人」が付されているが、使用頻度は李逵と比べて格段に少ない。

「真忠義」も、とりわけ李逵に多く付されている評語の一つである。この「忠義」の語については、笠井直美氏に詳細な論考がある。同氏は容評に見える「忠義」について、その意味を「損得や結果にこだわらず、わが身の犠牲を顧みず、甚だしくはわが身を捨てて、他人のために力を尽くすこと」と概括し、その対象は「仲間、兄弟分」が最も多いと述べる[22]。李逵の場合、当該の「忠義」は、主として彼が兄貴分として慕う宋江に向けられている。このほか、第 42 回と第 43 回に「孝子」の語が集中して見られるのは、老いた母親を梁山泊に迎え入れるために帰郷した李逵が、母を虎に食われ、その仇討ちをするというエピソードが語られるためである。

筆者は以前、容与堂本『水滸伝』における、作中人物の性質について「○○は△△な人である」と断定的に述べる地の文に着目し、調査と分析を行ったことがある。その結果、当該の叙述の出現には偏りがあり、特定のエピソードにおける特定の人物に集中していることが明らかとなった[23]。今回は再びこの種の地の文（本稿の用語に合わせ「性質断言型の地の文」と呼ぶこととする）を取り上げ、評語と対照してみたい。まず、以下に李逵の例を挙げる。

【性質断言型の地の文：李逵】

是個殺人不斬眼的魔君（人を殺しても瞬き一つしない魔王である）〔第 43 回〕／性急（短気）〔第 53 回〕／膽勇過人（並外れた胆力と勇気）〔第 63 回〕／是箇好殺人的漢子（人殺しを好む男である）〔第 92 回〕／是箇不怕天地的人

[22] 笠井直美「隠蔽されたもう 1 つの「忠義」――『水滸伝』の「忠義」をめぐる論議に関する一視点」（『日本中国学会報』第 44 集、1992 年）。なお、一般に考えられている「朝廷に対する忠誠」を意味する「忠義」の使用が皆無ではないことについても言及がある。

[23] 詳しくは、拙論「『水滸伝』の語りをめぐる考察――人物描写を中心に」（『東方学』第 126 輯、2013 年）。

（何ものをも恐れない人である）〔第 95 回〕

評語とは異なり、地の文には必ずしも肯定的とは言えない表現が並ぶ点に注目したい。ここでは主として李逵の豪胆かつ容赦のない性質が語られている。言うまでもなく、作中人物の人となりは、風貌・行動・発言・感情・思考など多様な要素を通して描き出されるものであり、語り手が前面に出て説明した内容が全てというわけではない。李逵についても、評者は本文における間接的な人物描写の中から、自らの価値観に合致した側面を積極的に読み取り、自らの心中に像を結んだ李逵への評価や思いを、評語の中で表出していると言える。

一方、『水滸伝』の物語の中核をなす人物である宋江は、小説の本文と評語における扱いが李逵とは対照的である。第 18 回で宋江が初めて登場した際には、まずその容姿や名声を謳いあげる美文が挿入され、次いで地の文の中で名前・家族・職業・愛好・資質・評判などが説明され、最後に再び宋江を称える詩が挿入される。このために一葉以上の紙幅が割かれるという破格の扱いとなっている。さらに、初登場以降もその人柄について説明されることが度々あり、中でも「宋江の閻婆惜殺し」のエピソードを描く第 21 回には、性質断言型の地の文が集中的に見られる。以下に例を挙げる。

【性質断言型の地の文：宋江】
是箇好漢（好漢である）／是箇好漢胸襟（好漢の度量である）／是個快性的人（さっぱりした人である）／是箇真實的人（律儀な人である）／是箇勇烈大丈夫（勇敢で気骨がある大丈夫である）／爲人最好（人柄がこの上なく良い）〔全て第 21 回〕

地の文では宋江の肯定的な性質が繰り返し強調されている。しかし、地の文で語られるような性質を容評が評価することは殆どない。以下に評語の例を挙げる。

【性質断言型の評語：宋江】
的確是箇假道學（まさに偽の道学である）〔第 36 回〕／孝子（孝行者）〔第 42 回〕／假道學、真強盗（偽の道学者、真の強盗）〔第 55 回〕／宋公明只是一箇黄老之術（宋公明はただの道学的な人間である）〔第 64 回〕／是箇老賊（悪人である）〔第 71 回〕／秀才氣（小利口な気質）〔第 83 回〕／婆子氣（女々しい気質）〔第 90 回〕／痴人（愚かな人）〔第 100 回〕

上記の中で唯一肯定的な性質と言えるのは「孝子」であろう。しかし、第 35 回の眉批には「宋太公是大慈父、只是宋公明不曾做得孝子（宋太公は慈愛に満ちた父であるが、宋公明はこれまで孝行者であったことがない）」という記述もあり、評価に齟齬がある[24]。このほかはいずれも宋江の否定的な性質が強調されており、「老賊」といった強い罵詈語も見られる。「秀才氣」と「婆子氣」は、仲間を失って泣き声を上げる宋江の行動に対して付されたものである。宋江は作中でしばしば涙を見せるが、容評ではその涙が真心からのものとは見なされておらず、第 92 回の総評には「假哭、信他不得（嘘泣きである。信じてはいけない）」と述べられている。

明代中期におこった新たな儒教の一派・陽明学のうち、陽明学左派の系統に属する李卓吾は、「童心説」をとなえ、人が生まれながらに有する偽りのない真心、

[24] 宋江は第 18 回に初登場する際の地の文で、「又且于家大孝、爲人仗義疎財、人皆稱他做孝義黑三郎（さらに大変な孝行者で、義を重んじ財を疎む人となりであったため、人はみな彼のことを孝義の黒三郎と呼んだ）」と語られており、孝行者として設定されている。

すなわち「童心」の大切さを説いた。そして、その童心を失わせるのは、道理や見聞であるとした。李逵の真っ直ぐで偽りのない点を高く評価し、宋江の虚飾（作品本文で直接的に語られるわけではないが、少なくとも評者はそのように理解している）を否定的に捉える容評には、それが真に李卓吾によるものであるかは別として、確かにその思想に通じる価値観が見てとれる[25]。

（３）二つの眼差しをめぐって

容与堂本の人物批評からは、二つの眼差しと評価軸が見いだされる。一つは「人物を描くこと」に向けられた眼差しであり、その評価の焦点は文章表現の巧拙にある。本節第１項で述べた通り、「畫」「如畫」「逼真」「好形容」といった評語や、総評における人物の造形と描写に関する指摘などが、そのことを示している。もう一つは、「人物そのもの」に向けられた眼差しであり、その評価の焦点は作中人物の人格の優劣にある。第 2 項で取り上げた李逵に対する称賛の評語や、宋江に対する否定の評語が示す通り、評者は作中人物の性質に注目し、自身の価値観に照らして、その性質が優れているか否かを問題にしている。

当然のことながら、人物が巧みに描かれていることと、その人物が人格的に優れていることとは、まったく別の問題である。品性の劣った人物を的確に描き、読者に嫌悪感を抱かせることができれば、それは文学として成功と見なされるであろう。実際、潘金蓮や潘巧雲といった淫婦たちは、評者からその人格が評価されているわけではないが、先述の通り、彼女たちを描き出す文章の巧みさに対しては高い評価が与えられている。しかし、宋江の場合には、その描かれ方に対する賞賛の語が並ぶわけでもなく、作中人物の好ましくない側面が「巧みに」描き出されているという認識とも異なるようである。

つまり、容評には「人物を描くこと」と「人物そのもの」への二つの眼差しが併存しているが、これらはすべての人物に等しく向けられるわけではない。李逵には両方の眼差しが向けられており――中でも後者の方がより熱を帯びた眼差しであると言えよう――、淫婦たちには「人物を描くこと」への眼差しが、宋江には「人物そのもの」への眼差しが、主として向けられているものと理解できる。

二つの眼差しのうち、より容評を特徴づけているのは、「人物そのもの」への眼差しと言うべきであろう。白木直也氏は、第 4 回において魯智深の言動に集中して付される「佛」「佛性」（いずれも仏心を備えていることを称える語）を取り上げ、「評語が最簡であるが故に却って智深の言行の一つ一つをピシッピシッと決めつけてゆく評者の気迫、とても絵空事の中の架空の人物を扱っているとは思へぬ真剣味さへ覚えしめる」と述べており[26]、この見解には大きく頷かされる。

白木氏の言う「架空の人物を扱っているとは思へぬ」という点に関しては、評中の人物呼称にも注目すべき特徴が見られる。容評は作中人物を愛称で呼ぶことがあり、特に顕著なのが李逵である。前項の例にも見える通り、「李大哥（李の兄貴）」という表現が度々用いられ、第 52 回の総評では「我家的阿逵（うちの逵ちゃん）[27]」とまで称されている。このほか、武松を「武二」、石秀を「石家三郎」、

---

[25] 李卓吾の思想については、阿部亘「李贄 明末「異端」の言語世界」（早稲田大学出版部、2022 年）を参照した。なお、同じく李卓吾評を標榜する全伝本は宋江に対して肯定的な評語を付しており、両者の価値観には違いが見られる。他方、金聖歎評は李逵を絶賛し宋江を容評以上に徹底して批判している。このように、宋江への評価はばらつきがあるが、李逵への評価が高い点は三者に共通する。人物評価とその思想的背景にアプローチする研究としては、井上浩一氏に一連の研究がある。井上浩一「『忠義水滸全伝』における「李卓吾先生評」の人物評価について」（『中国古典小説研究』第 4 号、1998 年）、同氏「宋江評価に見る金聖歎評の一特徴 ―金聖歎評に関する先学の論点整理を手掛かりとして―」（『集刊東洋学』第 81 号、1999 年）など。

[26] 白木直也「一百二十回水滸全伝の研究―其の「李卓吾評」をめぐって―」（『日本中国学会報』第 26 集、1974 年、110 頁）。

[27] 親しみをこめて呼ぶ際に、名前の前に「阿」をつけることがある。

燕青を「小乙」などの愛称で呼ぶ例も見られる。一方、宋江については「宋公明」と字で称することがある。字は一般に敬意を示すが、宋江に対する評者の全体的な態度を踏まえると、李逵らへの親しみのこもった表現とは異なり、一定の距離感や冷淡さを感じさせる。このような人物呼称も、容評における「人物そのもの」に向けられた眼差しの一端を示していると言える[28]。

4　全伝本「李卓吾評」との比較

最後に、同じく「李卓吾評」を称する全伝本の評語（以下「全伝評」と称す）との違いについても軽く触れておきたい。なお、全伝本は不分巻百回本系統の版本（遺香堂本や芥子園本を代表とする、鄧雷氏が「大滌餘人序本」と称する系統の版本）ときわめて近い関係性にあり、評語の内容も多く一致している[29]。したがって、本稿で言う「全伝評」は、必ずしも『忠義水滸全傳』固有のものではないことを予め断っておく。

全伝本[30]: 巻首題「忠義水滸全傳」。不分巻、全 120 回。明崇禎以降の刊行と目されている。

- 版式：四周単辺、無界、毎半葉 10 行 22 字、白口、無魚尾。
- 評語：眉批、傍批、回末総評。
- 圏点：マル「〇」、テン「◝」[31]。

全伝本の底本は容与堂本そのものではないが、先に挙げた容与堂本第 24 回の総評「將一箇烈漢、一箇呆子、一箇姪婦人、揃寫得十分肖像、真神手也」とほぼ同文の評語[32]が同回の眉批に見られることなどから、一部の評語は容評を参照して引き写された可能性が指摘されている[33]。しかしながら、そのような類似は例外的であり、両者の殆どの評語は、形式面・内容面のいずれにおいても大きく異なっている。

容評が一文字から数文字の短い眉批と傍批を主とし、単語や短い句のまとまりが多いのに対し、全伝評はより長い文の形式が多く、それらは主に眉批として付されている。容評に頻出する一文字評の形式はきわめて少ない。回末には「評」から始まる数行の総評を置くが、これは容評の「李卓吾曰」などから始まる形式とは異なる。また、本文中の注目すべき箇所や批評の対象となる箇所を示す際には、マルに加え、容評には使用のなかったテンも併用されている。

続いて、両者の人物批評を比較してみる。容評に人物の造形と描写に対する指摘が見られることは先に述べた通りだが、全伝評ではそれが更に深化している。たとえば、第 24 回の潘金蓮らのエピソードにおいて、西門慶が偶然を装って潘金蓮と対面する場面には、「如見（見えるかのよう）」「活現、如聞其聲（生き生きと現れている。その声が聞こえるかのよう）」、第 21 回の宋江と閻婆惜の会話場面には「一番交口、如見如聞、甚妙（一連の会話は、見えるかのよう、聞こえるかのようで、甚だ素晴らしい）」、第 23 回「武松の虎退治」の一幕には、「此一段寫得形聲具出、一幅打虎圖、活虎活人俱在眼前（この一段は形と声が共に現れてお

---

[28] 地の文における人物呼称については、拙稿「『水滸傳』の人物呼稱に見える待遇表現」（『日本中国学会報』第 68 集、2016 年）で論じている。

[29] 小松謙『水滸伝と金瓶梅の研究』（汲古書院、2020 年）、鄧雷『水滸伝版本知見録』（鳳凰出版社、2017 年）に版本の継承関係に関する詳しい考察がある。

[30] 底本には東京大学東洋文化研究所倉石文庫藏本（東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション、「忠義水滸全伝　一二〇回図一巻」、請求記号：倉石文庫 41973）を用いる。

[31] 全伝本では、句読点に類するテンやマル、人名を示す傍線など、機能性の記号も用いられ、より読者が読みやすい工夫がなされている。

[32] 將一箇烈漢、一箇呆子、一箇姪婦人、描寫得十分肖象、真神手。

[33] 黄霖「『水滸全伝』李贄評也属偽託」（『江漢論壇』、1982 年第 1 期）。

り、まるで一幅の虎退治の絵、生きた虎と生きた人間が共に目の前にいるかのよう）」といった指摘がある。

容評にも「光景在眼」「聲音在耳」という表現が見られたが、全伝評ではより細かい指摘が増えているとともに、容与堂本の「如何に人物を描くか」から一歩進み、「如何に人物を活現するか（生き生きと現すか）」という観点がより鮮明になっている。後出の金聖歎本へと繋がっていく、文章表現に対する意識の深化の流れが見てとれる。

人物に対する評価の方向性について見てみると、李逵に対しては「黒旋風稟忠直之性、一味莽撞、大有可用處、好打強漢、最是快人（黒旋風〔李逵の二つ名〕は忠実で正直な性質、唯々無鉄砲だが、大いに役立つところがあり、強者と戦うことを好み、最もさっぱりした人）」〔第 38 回〕といった評語があり、容評と同様に高く評価されている。一方、宋江は容評において否定的な評価が目立ったが、全伝評では対照的に高い評価が与えられており、その行動の正当性を強調するような解説も付されている。たとえば策略を用いて朱仝を梁山泊に引き入れた際には、「又須知是重義憐才、不是勾人落草（〔宋江の行動は〕義を重んじ才を憐れむもので、人を騙して山賊にさせるようなものではないことを知るべきである）」〔第 51 回〕、同様に関勝を引き入れた際には「如非公明義氣深重、恐關勝不爲用也（公明が義に厚い人物でなければ、関勝が従うことはなかったであろう）」〔64 回〕と述べるなど、宋江の義気が強調されている。

批評の表現においては、両者の間に顕著な違いが認められる。本稿で性質断言型と名付けた、人物の性質を簡潔かつ断定的に述べる形式の評語は、全伝評にはあまり見られない。李逵には「孝子、真忠臣」〔第 39 回〕「真義士、真忠臣」〔第 73 回〕といった同種の評語が確認できるものの、容評と比べて圧倒的に少ない。また、評中における人物の呼称についても、基本的には姓名が用いられており、黒旋風や宋公明といった二つ名や字の使用はあるものの、容評に頻出する「李大哥」のような親しみを込めた愛称は確認されない。

全伝本は正文の前に「發凡」を付し、評点の機能として「通作者之意、開覧者之心（作者の意を通じさせ、読む者の心を開く）」を挙げている。総じて、全伝評は、容評のように評者自身の感情を表出することよりも、読者の理解を導くことに重点を置く。容評には「人物そのもの」への眼差し、とりわけ評者の感情がこもった熱い眼差しが認められたが、全伝評においては、一歩引いたところから物語世界と作中人物たちを眺める、より観察的な眼差しが認められる。

５　おわりに

以上、本稿では、容与堂本『水滸伝』の評語が作中人物についてどのように語るかという点に注目し、考察を試みた。容評には、「人物を描くこと」と「人物そのもの」に対する、それぞれ異なる眼差しと評価軸が認められ、とりわけ後者が容評の特徴をなしていることを指摘した。また、評語と地の文において、作中人物への語りと評価の方向性に相違が見られる例についても紹介した。

容評が感情的な色合いを強く帯びていることは、一読して多くの読者が感じるはずであり、新しい観点とは言えない。しかし、具体例を挙げてそれを言語化する試みは、これまで十分に行われてこなかったように思う。本稿で取り上げた性質断言型の評語や、評中における人物呼称といった観点は、批評のスタイルを検討する上で、重要な糸口の一つになり得ると筆者は考えている。

反省点として、本稿では主に李逵と宋江を例にとり、人物批評の用例を提示したが、全体像と概略を示すにとどまり、それぞれの評語がどのような文脈で用いられ、どのような意味をあらわしているのかについて、十分な分析を行うには至らなかった。また、用例の抜き出しについても、なお改善の必要がある。今後は調査の精度をより一層高めるとともに、個々の評語を丁寧に読み解く作業を進めていきたい。